HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	太宰治「女生徒」における模倣と個性
Author(s)	田中, 帆南; Tanaka, Honami
Citation	研究論集, 21, 13（右）-31（右）
Issue Date	2022-01-31
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.21.r13
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84033
Type	departmental bulletin paper
File Information	21_rjgshhs_21_p013-031_r.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/rjgshhs.21.r 13

太宰治「女生徒」における模倣と個性

田中帆南

要旨

本稿は、太宰治「女生徒」を作中に散見される「模倣」と「個性」の観点から検討するものである。「女生徒」の語り手「私」は、「個性」への憧憬を語りながら「模倣」へ批判的な姿勢をとるが、作品末尾まで「模倣」から抜け出すことはできない。また、有明淑の日記の内容の継承と改変がなされ、本作品が成立したことにも着目した。

川端康成評や先行研究で着目されていたのは、女学生として考えられる「私」が子供から大人へ成長する過渡期であることと、その語りに見られる「不安定」さであり、論者はそこから少女性を読み取った。だがこうした論には、この小説が日記であるといった想定や、小説には一つの主題が貫かれているといった先入観が介在していると考えられる。また先行論の基礎となっている「不安定」さが、本作品成立の本質をなすと考えられる。そこで、「不安定さ」の要因とされる思春期を集中して取り上げることはせず、「模倣」と「個性」、そして女学生という社会的な立ち位置に注目した。よってはじめに、「女生徒」発表と同時代における共有されていた少女像・女学生像を、「女学生ことば」とされたものが女学生によってではなく小説によって作り上げられ、その言葉遣いと女学生とが結びつけられたことを確認した。このことから言葉遣いだけではなく、女学生らしさとして付与される他のイメージも同様に、少女小説や雑誌といった虚構が起源であるとした。作中において「私」も女生徒的とされる要素を多分に発露していた。作品内と作品成立において、「個性」と「模倣」がどのように位置づけられるかを本文に沿って吟味した上で、最後に女学生言説の成立を接続し、言説の虚構性がこの作品で示されていると した。

すなわち「女生徒」は、女学生特有のイメージを展開していた言説への批判と、固定化された女学生像の実在不可能性を示したものだと結論づけた。

はじめに

本稿で扱う「女生徒」は、一九三九年に『文學界』四月号に掲載され、同年七月に砂子屋書房から『女生徒』として出版された。一九四二年六月に『女性』に再録されている。「女生徒」発表当時の評価として最も知られているのは、川端康成のものであろう。「この女生徒は可憐で、甚だ魅力がある。少しは高貴でもあるだらう。（中略）作者は『女生徒』にいはゆる『意識の流れ』風の手法を、程よい程度に用ゐてゐる」（川端康成「太宰治氏の『女生徒』と『懶惰の歌留多』」、一九三九・五）[1]とあるように、現実の少女の独白を再現しているかのようだという点、そして意識の流れを用いたような小説であるという点が高く評価されている。先行研究を見ると、同様の評価は現代にも通ずるものだと言える。

先行研究の議論の多くは、「私」の不安定さが思春期、あるいは少女期特有のものであるといったものだった。関谷一郎は「『少女』から一人前の『女』に至る過渡期にいる」「私」が、「捉えどころのない『憂鬱』や『苦しさ侘びしさ』」を語るが、それは「根源的には少女でも成熟した女でもない不安定な〈アイデンティティ〉」が由来であるとしている[2]。それに先駆けて、奥野健男は、「題材も自分自身や社会のことを避けて、女性の生理的心理にもとめます。（中略）。前期と作風が全く変ってしまった、そして少くとも作品には、倫理性のひとかけらもありません。彼は上昇も下降もしない、つまり倫理的でなくなったのです」と評価した[3]。榎本隆司は作家論的解釈を施し、「大人になる前の女生徒の肉体」と「その深層心理のひだ」の描写のきめ細やかさと、作品全体の明るさを評価した[4]。以上三者は共通して、「中期」と称される「安定と開花の時代」における女性独白体作品であると位置付けた。東郷克美は三者と同様に「中期」に言及し、「中期以降の太宰の表現スタイルを決定した」とする。また、「大人というにはまだ幼く、かといってもう子供ではないという、中途半端で、それゆえに不安定にゆれうごく年頃の主人公の設定」により、「甘ったれた弱さも、幼い感傷も、目まぐるしく変る思念もこの年頃の女生徒のものだからこそ抵抗なく受けとれる」と述べた[5]。それに加えて、「生活と芸術のはざまで、蕩揺しつつあった」[6]という当時の太宰の姿と重ね合わせている点も、それまでの先行研究を踏まえていると言えよう。

兼弘かづきはこうした見解を踏襲し、前期における太宰の心情を相対化しようとする意図に基づき、女生徒である主人公の「不安定なアイデンティティ」という設定の必然性を主張した[7]。兼弘は、東郷の論にも見られた「不安定な揺れの中にいるという特徴」を持つという後藤康二の論[8]に加え、根岸泰子による「少女性」[9]という性質を重要な要素とした。「私」の目や視線への関心の高さに注目し、小説末尾の解釈を試みた伊藤友紀恵は、「素直な心持で生きたいと願う」「私」の姿を読み取り、「はっきりとした意志・願いを持った一少女の姿が浮かび上がってきたと言える」と結論づける[10]。

宮内淳子の論は、家父長制の制度にとらわれる女生徒の「不安定」さの指摘を基本的な姿勢としている。東郷克美の「女語り」が「受

動的な自己表現を果たしていこうとする」という主張や、原子朗の「〈をんなの言葉〉による「弱者の自由」の保証と、その弱者の従属性が逆転する「契機と快感」を味わうことができるという論を踏まえつつ、「なお一方で、『女生徒』の語り手には『制度・規範・拘束』にもたれかかりたい心情」もあるとする[11]。

ここまで先行研究を見直してきたように、多くの論者が「私」の「不安定」さから導かれる少女性を論の中心として、女学生という「私」の設定における成長期をピックアップしてきた。二〇〇〇年に有明淑の日記が「資料集　第一輯」として発行されるまで、「私」の不安定さを「少女」期、思春期特有のものだと措定してきたということになる。

思春期の少女性を中心に扱った論の主張する「不安定」さが導かれるのは、女学生と想定される「私」が思春期にあると判断されることに起因しているのだろう。本作品でも「めきめきと、おとなになつてしまう自分を、どうすることもできなく、悲しい」とあるように、大人となることへの思いが語られているが、子どもから大人への過渡期という宙吊り状態は思春期の特徴とされている。成長途中の「私」から連想される「不安定」さは、先に引用した東郷の論に見られるように、次から次へと移っていく語りの内容と重ねられている。「不安定さ」は、大人への成長という身体的あるいは社会的な過渡期に重ねるだけではなく、「私」の語りの内容にも重ねられている。

しかしこれは、ある先入観を介しているのではないだろうか。例えば一日の出来事を書いた日記であるという先入観、もしくは書かれた小説は一貫した主題に向かうはずだといった先入観によって、「不安定」だと判断され、思春期にしか見られない特異な文体だと見なされている。

まず、これを日記と断定できる絶対的な要素はない。同じく、日記ではないという決定的な要素もない。例えば、断片的とはいえ、起床直後から学校に行くまで、帰宅から就寝直前の様子までを書く日記はないとはもちろん言えないが、これを日記というジャンルに固定化できない。日記と仮定しても、原典の有明淑の日記がそうであるように、一日の記録の中に一貫性を持たせる必要性はないだろう。また「女生徒」の文体は、話題や心情の移り変わりが多く見られ、特徴的と言えることは確かだが、思春期に限定することはできないのではないか。人間の考えることは変化し続けているため、こうした断片的な「不安定」さこそが、人間の思考を表すにはそのままの状態に近いと言えるかもしれない。

あるいは、「不安定」さが本作品成立の本質的なものであったならばどうであろうか。この問題については後で検討していくが、有明淑の日記が参照されていることと深く関係している。

したがって本論文では、「不安定」さを思春期とは連結させずに論を進めていく。作中で一貫して言及されている「模倣」と、それに対する「個性」を中心に取り上げ、それらが小説内部でどのように位置づけられているかを確認し、「女生徒」の成立自体についても同様の観点から捉えることで、読者の存在も考慮した上で「女生徒」

という小説全体が何を果たしたかを探る。はじめに、表題である「女生徒」が、語り手の社会的な位置づけを示すものとして機能していることから、同時代の女学生像について概観していきたい。

一　同時代の女学生

先行研究の多くが中心に置いている「私」の女学生という設定についてだが、語っていく中で学校へ通い、友人たちと交流している様子が見られることから、「私」は女学生であると判断しても良かろう。では同時代における女学生像とは、どのようなものだったのだろうか。

中村桃子は、「女学生ことば」の成立について詳細に論じているが、その特徴とされた、語尾に「～てよ」「～だわ」を付する「てよだわ言葉」の起源が小説にあると述べた。「てよだわ言葉」を使い始めたのは言文一致小説の書き手であり、初めて見られたのは西洋の小説に登場する娘の台詞の翻訳であると指摘した[12]。ここでの例に、二葉亭四迷が『父と子』の翻訳に、「西洋の娘」を表すための「女学生語」を表現するにあたっての苦心を挙げている。中村は文末詞を翻訳に利用した理由として、「ハイカラ娘」という「日本人の理解を超えた西洋文化を象徴する」ものを必要とし、創作したためとする。そしてその言葉遣いは、日本の女子学生の登場人物にも用いられ、さらには「実際の女子学生が小説内の言葉づかいをまねる現象まで指摘される」という状態となることが説明されていた[13]。加えて、「てよだわ言葉」を使わず、「お待ちあそばせ」た「いらっしゃい」といった「丁寧な言葉遣い」を用いる人物は「模範的女子学生」を、「てよだわ」言葉を用いる人物は「軽薄な女子学生」を表している家庭小説を紹介した。そしてこの「軽薄さ」が印象的とされる言葉遣いが、女学生の「セクシュアリティ化」へつながったことにも言及した[14]。

「小説が、特定の集団に特定の言葉づかいを割り当てるという行為が、その集団と言葉づかいを結びつけていった」[15]とあるように、特定のグループの言葉とされるものは、小説などの虚構や雑誌といったメディアに書かれたことに即して決定されていた。「女学生ことば」とされるものが作られたものだということを確認したが、女学生らしいと判断されるような言葉遣い以外の属性も同様の流れで一般化されていったと考えられるだろう。少女小説が掲載された雑誌では投稿欄という場において、読者が少女像の構築をしていたことを指摘する論を次に取り上げていく。

明治期における少女像の成立を主として論じた本田和子は、少女たちによる少女雑誌の投稿欄でのペンネームの使用が、「ことばの産物」[16]としての少女像を形成し、「少女幻想共同体」という虚構の集団を作り上げ、自ら広げたことを指摘している。大正期に『少女の友』の常連連載者であった原初代が亡くなった際に、遺構となった今田絵里香は、『しのぶ草』に多くの投書が寄せられていたことに関して考察した。投書には、「半ば黄ばんだ木の葉が夢のやうに一つ二つ散る並木を通して、物すごい程皎京都々と照る月の光！　私

はしのぶ草抱へて楓の木に近よりました。水晶のやうな月をじつと見つめて居ると、まぼろしのやうに浮んで来る初代さんのあの俤！ああつい涙が流れます。いつまでも泣かせて下さい。いえ泣かせて下さい」[17]といったものが挙げられ、こうした悲哀が共有されていたことが指摘されている。ここに読者同士による交流が見られ、雑誌読者の手による共同体形成が認められるだろう。ペンネームの使用が一九一〇年代に至っても続いていること[18]を含めて考えれば、投書欄での少女像や女学生像の自己形成とその流布は明治期から続いていたことは容易に想像できる。菅聡子は「女生徒」と同時代に『婦人倶楽部』で連載されていた、吉屋信子『女の友情』の投書欄について、読者が『少女倶楽部』をはじめとする少女雑誌の読者を卒業していることを踏まえ、その「多くが少女時代の『花物語』体験を共有していること、言い換えれば彼女たちにとって『花物語』の土壌がすでに前提として存在していたことがうかがわれる」としている[19]。ここでも、作品を媒介に投書欄で共同体が形成されていると理解できよう。

以上で引用してきた本田、今田、菅から、少女小説とその読者である女性が、少女や女学生のイメージの構築に携わってきたということがわかる。どのようなイメージにせよ、それは本田の言葉を借りれば「ことばの産物」であり、現実のものではなかった。こうした少女や女学生に関する虚構の言説の構築は、雑誌や作品の読者たちが担ってきたと言える。

少女小説の読者層についてだが、久米依子は「北畠八穂は一九三五年（昭和十年）頃、自宅に遊びに来た林芙美子が、来合わせた『英国カンタベリー寺院で修業を終えた東大出の人と、これも東大出の哲学者』に吉屋作品を読んだか聞いたところ、『二人の若い男性は、ちょっとはにかみながら、従妹と姉の『花物語』の麗筆をこっそり読んで酔ったと答えた』」という北畠の回想を紹介し、「『花物語』が中産階級の少年読者にも密かにセクシュアルな物語として享受されていた事情がうかがえる」と述べる[20]。少女小説の読者層は女性だけではなく、男性も包含していたことになる。作品に描かれた少女像や女学生像は、性別にかかわらず共有されていたと言えよう。

「女生徒」発表当時においては、吉屋信子『女の友情』や『女の教室』、川端康成の『乙女の港』が挙げられるが、女学生のイメージは、少女小説や少女小説が掲載された雑誌が発端となって、読者が加担し作られていった。本作品における「私」も多分に「女学生らしさ」を含んでいる。ここでは「胸のところに、小さい白い薔薇の花を刺繍して置ゐた」下着を例に取り上げたい。

伊藤は、「私」の言う「個性みたいなもの」に当たると主張した[21]。「誰も見ない」＝「認められない」という関谷の見解を引き継ぎながら、「見てほしいものでもあるが、他社から見られることのない」「風呂敷」や、「誰かに見てもらいたいと望むものではない」にもかかわらず、学校で「見られるものとなった」「アンブレラ」と比較して、下着は「私」が「内側に隠しているもの」を表しているとした。「私」自らの手による刺繍が隠され、「私」がこれを「秘密」として「大切にしている」という下着に関する情報の整理は正確だが、この三つ

のアイテムを「他者からの視線への意識」に回収するよりも、下着に関しては、「私」のセクシュアリティを感じさせるものとして解釈した方が違和感のないように思われる。決して他者が見ることのできない女性の、さらに言えば女学生の下着というものを登場させることで、女学生としての「私」に、性的な視線を感じさせる効果があるのではないだろうか。関根は、若桑みどりが美しさや秘密を象徴するものとしての薔薇を論じたものを引用し、「美しさへの憧憬や秘密の共有は少女の特性とも言えるものである」[22]とまとめたように、薔薇の刺繍から少女らしさを感じさせることも踏まえておきたい。渡部周子は、花と女性との結び付けが女性の聖化という企みがひそんでいるというアラン・コルバンの指摘を取り上げ、明治期の浪漫主義者による百合の表象が「恋愛（プラトニック・ラブ）の対象となる純潔な女性を象徴」[23]し、「明治国家の規範としての少女像を逸脱するものではない」[24]としたが、薔薇も幻想としての女性を思い起こさせる要素である。

こうした普段見られない女学生の姿の覗きを感じさせるような場面は、入浴時の「自分のからだのほの白さ」へ言及する箇所も当てはまる。「私」の思索の内容だけではなく、身体を読者の脳裏に浮かばせるような描写を挿入していると言えよう。下着や肌への言及は、「私」に現実的な肉感を与え、女性としてのセクシュアリティを読者に意識させる。また、小説全体で促進させられる「私」＝女学生というイメージは、単に女性としてのセクシュアリティではなく、女学生という女性のカテゴリ内でも特定の対象へのセクシュアリティを想起させるのではなかろうか。

「私」しか知ることのない「秘密」は下着のみならず、風呂上がりの場面の「ひとりきりの秘密を、たくさんたくさん持つようになりました」という語りにあるように、「私」の思考も含むことを読み取れる。作品には「私」の起床から就寝までが書かれている。作品を読むことで、本来は語り手「私」しか知りえない「私」の日々の思考＝「秘密」を共有しているという感覚が生まれるのではないだろうか。その結果として、読者にすべてが曝け出されているかのように思わせる可能性を指摘できる。

二　「模倣」と「個性」の二項対立と自己規定

通学途中の列車の中から、作品全体にわたって言及されているのは、「模倣」についてであろう。「模倣」の初出箇所は、「私」だけではなく世の中全体の人間にも共通するものとして述べられており、それは批判的に見られていた。「模倣」は作中にあらゆる言葉で言い換えられている。「ゼスチュア」や「ポオズ」、あるいは「真似」といった「模倣」の言い換えは、「私」以外の登場人物にも当てはめられて語られている。「模倣」に対するものとして、配置されるのは「個性」である。

> でも、みんな、なかなか確実なことばかり書いてある。個性の無いこと。（中略）独創性にとぼしい。模倣だけだ。

私たちには、自身の行くべき最善の場所、行きたく思ふ美しい場所、自身を伸ばして行くべき場所、おぼろげながら判つている。（中略）始終生活と関係のある親類というものも、ある。知人もある。友達もある。それから、いつも大きな力で私たちを押し流す「世の中」というものもあるのだ。これらすべての事を思つたり見たり考へたりすると、自分の個性を伸ばすどころの騒ぎではない。まあ、まあ目立たずに、普通の多くの人たちの通る路をだまつて進んで行くのが、一ばん利巧なのでしようくらいに思はずにはいられない。

「私」にとって、「模倣」を現実のものとしたとき、「個性」は理想だと言えよう。この引用部分では、理想である「個性」が、実際は人々の胸に抱かれており、それを実行できないでいることが述べられている。この引用の後で、理想を実行する親戚が紹介されているが、その人は「固い信念を持つて、理想を追求して」おり、「本当の意味で生きてゐる」と評価される。しかし親戚中から「馬鹿あつかい」されているという。「私」は「そんな馬鹿あつかいされて敗北するのがわかっていながら」「自分の考えかた」、すなわち「個性」を伸ばすことはできないとして、理想を実現することの不可能性を表明する。だが、「頼れるだけの動かない信念をも持ちたいと、あせつてゐる」とあるように、他者ではなく自分の中に、「個性」を伸ばすために必要なものの確立を望んでいることが示されていた。

作中では「私」によって理想と現実が語られており、それぞれ「個性」を表出させること、「個性」を持ちつつも「模倣」に徹することが当てはまる。「個性」と「模倣」は、「私」によって二項対立の枠を嵌められている。

「模倣」に対して「個性」とは、二つ目の引用にあるように、周囲の人々や世の中を意識せずに、「普通の多くの人たちの通る路」ではない生き方をすることだと考えられる。「自分の考えかた」を貫き通すことはもちろん、自分以外に同じ行動をしている他者が存在しないことが、「個性」を伸ばして生きることだとされているのだろう。「個性」について、「はつきり自分のものとして体現するのは、おつかない」ため、「人々が、よいと思ふ娘にならうといつも思ふ」と言明されている。つまり「私」は「個性」を発揮できないならば、人々の思い描く「よいと思ふ娘」像を「模倣」する意志の表明をしている。それは「よい娘」という自己規定をし、そうした生き方をするということであり、今井田夫婦を歓待する場面見られるように、他者のために生きるということにもなろう。もちろんここで、「模倣」することによって自己規定を果たしており、それが「個性」であるとする余地もあるだろう。だが「お母さん、お父さん、姉、兄たち」、「生活と関係のある親類」、「知人」や「友人」、「世の中」といった他者を介さないことが「私」の望む「個性」の条件であるため、「模倣」と「個性」は「私」の中では常に現実と理想として対立する。

「真似するお手本がなんにも見つからなくなつた時には、私は、一体どうするだらう」と述べる「私」は常に「模倣」しており、「どれが本当の自分だかわからない」。「模倣」してばかりで自分の正体が

わからないと主張する「私」にとって、「個性」を体現することが「本当の自分」を手に入れるのと同じだということになる。

以上のように、「私」は理想を実行することができない中で、どのように生活を送るかを決める自己規定を試みる。その規定の基準を、亡き父や苦小牧に住む姉といった「私」のそばから離れてしまった家族に求める。

せんの小金井の家が懐かしい。胸が焼けるほど恋しい。あの、いいお家には、お父さんもゐらしつたし、お姉さんもゐた。お母さんだつて、若かつた。（中略）本当に楽しかつた。自分を見詰めたり、不潔にぎくしやくすることも無く、ただ、甘へて居ればよかつたのだ。なんといふ大きい特権を私は享受してゐたことだらう。しかも平気で。心配もなく、寂しさもなく、苦しみもなかつた。お父さんは、立派なよいお父さんだつた。お姉さんは、優しく、私は、いつもお姉さんにぶらさがつてばかりゐた。

引用では、父や姉がいた幼い頃は「甘えて」いられる「特権」を持っており、自身について思い悩むこともなかったことが述べられている。「私」は末っ子であり、「ぶらさがり」る対象には父だけではなく姉も当てはめている。しかし、なぜ母は含まれないのだろうか。それは母も「私」と同様、「ぶらさがり」る相手が不在であることが要因だと考えられる。この引用の直後、母は蚊が出て来たとき、ほどきものをするとき、あるいはお茶がおいしいとき、父を思い出すと言っていたことが述べられるが、これは日常的に父のことを思い出しているということだ。実の子である「私」を見ても「楽しみを感じない」と言い、父がいないのならば「幸福」も「来ないほうがよい」と言う母は、楽しさや幸せの基準を父に置いていたということになろう。「お母さんの悲しがつてゐるのは、もつとお父さんのよい妻であればよかつた、もつと〳〵尽せばよかつたと思つてなの」[25]という日記に書かれていた、母の父への献身的な発言が削除されていることからも、作中の母は日記よりも利己的な理由で父を求めていると言える。

「私」は「あれもいけない、これもいけない、と言わずに、こうしろ、ああしろ、と強い力で言いつけてくれ」るような生き方の基準として父を欲している。そのために、「私」のように生き方そのものではなく、生きることに付随する喜びや楽しみに関してではあるものの、同様に基準として頼る存在である父を失った母は、「私」に「大きな特権」を与えることはできない。むしろそれを与えられる立場にある。

「同じ弱い女」について確認しておきたいのは、そもそもこの自己規定は「私」の提起した「模倣」と「個性」の問題が解消されていないということだ。「同じ」という修飾から明らかなように、「私」の目指す他者を必要としない「個性」という形態での自己規定は達成されておらず、「弱い女」の「模倣」という範囲に留まる。「模倣」

に対する批判や「個性」への憧れが語られてはいても、結局「模倣」からの脱却や「個性」の試みは見られない。それは、「ほんとうに私は、どれが本当の自分だかわからない。読む本がなくなって、真似するお手本がなんにも見つからなくなった時には、私は、いったいどうするだろう」という言述から分かるように、常としてきた「模倣」が「私」に染みついているからであろう。後述するが、この小説において最後まで「模倣」する様子が書かれるのも、「私」から「模倣」が切り離せないことを示していると考えられる。「模倣」の問題は、本作品の創作過程の観点から、再度「個性」と絡めて論じていく。

ここで考えておきたいのは、母に対する「私」の離反と回帰である。兼弘は、母から離反する「私」は、母の「不自然さ」は「我慢がならないもの」であったと論じている[26]。「お客さんと対してゐるときのお母さんは、お母さんじゃない」という箇所が引用され、その理由を「私」が「自然であること」に「絶対的な純粋さを求めている」ことにあるとした。有明の日記においては、例えば、「此の頃何かあると、すぐお母さんに反抗したくなる嫌ひな自分である事を、すまなくなる[27]」ことや、「お母さんと、小さい口争ひをしてしまったこと[28]」が記述されており、「私」の母に対する態度は太宰が原典を改変して取り入れた要素だということがわかる。ここでは次に触れる母への回帰と対比的に扱うことも視野に入れるべきと考える。母を批判的に捉える「私」の態度は、単に離反としてだけ捉えておく。

一方で「同じ弱い女」という箇所は、離反に対して回帰だと言えるだろう。「私」は、電車の中での「厚化粧のおばさん」やバスの中の妊婦を批判しながらも、彼女たちの「雌のにおい」を自分と共通するものとして考える。さらに自身の母にも批判的な視線を向けるが、末尾に至って「同じ弱い女」という括りで自身との同一性を表明することになっていた。離反のはたらきは、「同じ弱い女」という回帰が、一度は「私」自身によって批判的に捉えられたものであり、母の「模倣」であることを示すことにある。父を失った母を何かに頼る存在として批判的な見解を示し、その後での「同じ弱い女」という客体化し批判視されたはずの母と同じ枠に自ら押し込める際に、「私」のその立ち位置に関する「私」の見解がすでに述べられている、相対化されているということそれ自体に意味がある。それが「自分のぶんを、はつきり知つてあきらめたときに、はじめて、平静な新しい自分が生れて来るのかも知れない、と嬉しく思つた」という「私」の「模倣」せざるを得ないことへの「あきらめ」に繋がると考えることができるためだ。

三　「女」という枠での自己規定

ここで「弱い人間」ではなく、「弱い女」とされたことに注意したい。「模倣」に留まるしかない「私たち」という括りには、「女」だけではなく「男」も含まれていたはずであり、先ほど引用した電車の中での「私」の考察からも読み取れる。有明の日記にも、周囲の「女」について書かれていたが、それは関根の指摘に「世の中から遠

ざけられる事によって知的好奇心が減ることを念頭に置いて、老いることが厭で悲しいとなっている」[29]とあるように、「老い」への嫌悪を軸としていた。例えば「厚化粧」や「大きいおなか」の「女」について、「同じ様に、年を取つてゐる事が厭だ」と記述されている。結婚や夫、子供に縛られる女への批判も書かれてはいるが、「男」に対する「女」というよりも、自立性のない女が強調されて批判されている。

「女生徒」では、「女」が「男」と対になることに力点が置かれている。しかしそのことは日記のように直接的には示されない。「子供背負つてねんねこ着てゐ」て「厚化粧」をしていることや、「お腹が大きい」という特徴のみが書かれる。そして「私」自身によって、結婚についてたびたび言及される。父の不在によって生きる楽しみや幸せを見出すことができない母は、「男」に頼り、自立できないという原典の日記における「女」のモチーフを継承している。ハリウッドで一緒に髪をつくってもらった場面では「お寺の娘さん」であるキン子さんという友人が登場するが、彼女も「私」によって批判的な視線を送られる。日記ではキン子さんという名前ではないが、有明の友人であるお寺の娘さんは五月二四日に登場している。

學校に行くと、お寺の娘さんから相談(ママ)をされる。今夜お寺の息子見合ひをするのだけれど、困る困ると云つてゐる。「前から此の事を云つてゐたのに、き〔期〕待をしてゐたのにと云つて、ハア〳〵笑つてしまふ。雲居さん、急に元気になつて、「それはそうと帯はどんなのがいゝの」なんてさつそくやり出す。実に何んにも考へない可愛らしい人。「もち屋はもち屋つてこと知つてゐる」なんて私をびつくりさせた事もある。「それどういふ意味」つて聴いたら、「お寺の娘は、お寺が一番いゝのよ。一生食べるのに困らないでせう」つて、又私を驚ろかした。[30]

この引用箇所には、お見合いの相談をされたことが書かれており、「もち屋はもち屋」の会話も見られる。髪をつくってもらう描写は「女生徒」で加筆され、「このまま、見合いに行こうかしら」というキン子さんの思いつきは太宰独自の創作である。キン子さんに対して「私」は「きようは、あんまり大袈裟にはしやいでゐるので、私も、さすがにいやになつた」と述べる。髪にパーマをかけたという出来事とお見合い結婚という事柄とを結びつけた点が「女生徒」固有のものであり、その後に妊娠した女性を見かけ、朝の電車の中での厚化粧の女性を思い出して嫌悪感を述べることは注目に値する。つまり、ここでの「私」の「いやになつた」という思いは、作中にあるように、髪をこっそりつくってもらうことにしょげてしまい、自分を「雌鶏」のようだと感じたことに加え、キン子さんがそうした「雌」への「私」の嫌悪感を、外見を着飾ることと結婚とを結びつけて言語化することで、「男」のために着飾る「女」という「私」の考え方に具体性を持たせたことに対するものだったのではないだろうか。

今挙げたような周囲の女性の特徴を、まとめて「雌」とした点が、

それに対する「雄」=「男」を意識させていると考えられる。また、周囲の成熟した女性だけではなく、「私」によって男性に視線が投げられているのも、「男」／「女」の図式を想起させる要因となっている。「この可愛い風呂敷を、ただ、ちよつと見つめてさえ下さつたら、私は、その人のところへお嫁に行くことにきめてもいい」や「どんな豪勢なステージでも、結婚式場でも、こんなにたくさんの花をもらつた人はないだらう。（中略）花を、危い所に行つて取つて来てくれた、ただ、それだけなのだけれど、百合を見るときには、きつと坑夫を思ひ出す」など、男性への結婚意識と思しきものが散見される。挙げた二点が原典の日記ではどのように書かれているかという問題だが、前者は五月二一日に「それあ綺麗な、女らしい風呂敷を貰ふ」[31]という記述はあるものの、風呂敷を見つめられたら結婚するとは書かれていない。後者は、六月一〇日の記述を内容は変えずに用いている。風呂敷を見つめられることと結婚を接続させた前者の改変は、後者の坑夫を姉や父のように「私」の元を去ってしまった思い出の中の人としてだけではなく、思慕の念を感じさせる効果がある。先ほど述べた「雌」としての「女」という作品にまばらにある認識は、その土台となっていることも指摘できる。

先のキン子さんは、着飾った外見と結婚とを結びつけたが、「私」は自身への施しと「男」とを結び付け、結婚という方向性を示す。それのみか、日記にそのまま書かれている植木屋さんや百合の花を取ってくれた坑夫のエピソードを思い出す様子を見せる。こうした違いはあるが、日記の「男」を頼る「女」のモチーフを継承し変化させた「女」=「雌」という認識や、周囲の人間を男女に分けて視線を向ける「私」の発話内容は、「私」が結婚を意識していることを示し、そこに「男」対「女」という二項対立を思い起こさせる一因となるのには変わりない。

ハリウッドへ行く自分についても、「私」の嫌悪する成熟した女性たちと同じように「自分も雌の体臭を発散させるやうになつて行くのかと思へば、また、思い当ることもある」と自覚を述べる。その上で、今井田夫婦に媚びへつらってしまう母と自身について語り、「男」に対する「女」という特徴に、こうした母と同様の外面の偽り、つまり「個性」の抑圧という特徴を加え、「同じ弱い女」という自己規定へと向かう。原典の日記との違いは、「女生徒」においては、こうした外見的な特徴と、それが「男」を意識させることや結婚とを結び付け、「男」に対しての「女」を表出させることに重点が置かれているとまとめられる。

さて、小説の最終部分で行われる「弱い女」という自己規定の直後、「私」は母を支える今後の展望について述べる。この箇所における一種の明るさや意志を評価できるかもしれないが、これは「私」が意識していた「雌」としての「私」の問題を解決したことになるのだろうか。

自ら母に回帰する点に「私」の主体性を認めることも多少は可能だろうが、結局は「男」に対する「女」に留まることに変わりはない。「私」は、「女」を意識させる周囲の女性を批判的な視線を送り、母までも離反の対象として「女」の枠に置きながら、自身の中にそ

うした「女」を感じている。しかし実際の抵抗は見られない。それは成長という避けられぬものへのあきらめかもしれないが、重要なのは抵抗に重点がないということであろう。

「女」という自己規定に対する抵抗に重点がないというより、それに縋るしかないためといった方が的確かもしれない。作中では父を想起する描写が散りばめられているが、先に述べたように、父は「私」を規定する絶対的な存在として設けられている。しかし父はすでに死去しており、自分を規定してくれる基準としては機能していない。その代わり、「私」の中で父のイメージは固定化され、あくまで憧憬の対象として描かれる。

学校からの帰り道に、夕焼けの空に美しさを見る場面を、吉田咲は「主人公の呼びかけに答えて、父が『靄』となって主人公を包み、撫でる形で抱擁している、と読み替えられるのではないか。父との空想上の近親相姦である。主人公の『言』によって、幻の『事』が出来したのではないか」と解釈する[32]が、父への近親相姦的な感情は他の箇所を含めて考えにくい。この場面では、「です」「ます」「でしょう」などの丁寧語が多く見られるが、これは「お父さん」という三度繰り返される呼びかけに続いて、父へ話しかけていることを意識させるような文末である。空の記述は、有明の日記では五月四日の記録に対応するが、「お父さん、お父さん」という呼びかけから始まって、「お父さん、誰に感謝をしたらいゝんでせう。美しく生きたいと思ひます」と閉じられており、その間にある空についての記述はすべて丁寧語となっている。つまり五月四日の日記は、その日の美しい空への思いを、丁寧語を用いて亡き父へ語りかける形になっている。したがって「女生徒」の帰宅途中の空に関する丁寧語を伴った言及も、父への語りかけだと言うことができるだろう。

この場面では、「美しく生きたいと思います」といった生き方の方向性を宣言する様子も見られるが、こうした父と空の美しさの結び付けは、星を見て父を思い出す場面にも見られるが、もう去ってしまった存在を空や星といったものと結びつけることで美化し、憧れとしてしつらえていると言えるのではないか。もちろん父のイメージの美化は、そうした事物と結びつけずとも、「私」が来客時の母に冷たさを感じるときにも見られる。父は不在ゆえに、「私」の中で都合の良い形で断片的に引用され、理想的な求めるべき存在となっている。

憧憬の対象として父を措定することで、「私」は暫定的に生き方を見出していると言えるかもしれないが、やはり自己規定の基準として絶対的な父が、「私」の前に現実的に姿を現すことはもうないことに変わりはない。「私」はそこで、新たな基準を要することになる。そこで自身の性に着目し、「男」に対する「女」という自己規定を手に入れたのではないだろうか。「私」にとって「男」に対する「女」は、電車やバスの中で見た女性たちをはじめとして、嫌悪の対象とされてきた。しかし父の不在はそれまでの自己規定を揺るがし、父に代わる新しい基準として、「男」を求めることとなった。そのために嫌悪の念は残るとはいえ、実際に抵抗する様子は描かれないのである。

四　作品成立における「模倣」／「個性」の曖昧さ

「模倣」と「個性」という視点から見たとき、「女生徒」の創作過程についてはどのように展開できるだろうか。

まずは、この小説がどのように成立しているかを整理しておこう。関根が詳細に立論した通り、この小説の大部分は有明淑の日記に依存している。日記から取捨選択され、並び替えられた文章に、太宰によって付け足された文章が加えられて成立したのが本作品である。約三カ月の記録を一日に集約させたことも太宰による改変である。細谷博は、相馬正一の「太宰の創作歴の中に位置づけることには、やはり問題があるかと思う」として「女生徒」の作品としての自立性を否定したことを受けて、加筆や修正が行われている箇所の解釈を通してその「オリジナリティー」を再検討した[33]。当然のことではあるが、先に挙げた改変こそが、有明の日記を「女生徒」という作品たらしめている。細谷の言葉を拝借すれば「コラージュ」と「〈造形〉」が、本作品が剽窃ではなく「創作」である所以となっている。有明の日記への依存度は高いが改変を行い、作品が成立していることを考えれば、「女生徒」は有明淑の日記の剽窃というよりは、作中の言葉を用いれば「模倣」だと言えるのではないか。ここでの「模倣」には、改変だけではなく日記の文章の剽窃も含まれるが、大切なのは「模倣」によって文脈が変化しており、それが「女生徒」を読解する際に最重要視されるという点である。そう考えると、「模倣」とは、ただ対象の姿を再現するだけではなく、主観的な世界観を通したうえで具体的に描き出す行為であると言えよう。

作品内で「模倣」は、「個性」に対するものとして配置され、他者を意識したものだとされていたことはすでに確認した。ここで「個性」をオリジナルと換言し、この作品の「模倣」性を考慮に入れると、「女生徒」はオリジナルとは言えないことになるだろう。しかし「女生徒」がひとつの小説として、つまりオリジナルとして成立していることは事実である。有明の日記と「女生徒」を読んだとき、例えばそれぞれ異なる感想を抱く。常識的なことではあるが、このことが「女生徒」が日記とは異質のものとなっていることの、「女生徒」のオリジナルである証である。そして、有明の日記における文体や内容の剽窃は、本作品の成立には欠かせないが、それだけではなく先ほど述べたような意味での「模倣」を本質として「女生徒」自体は成立している。日記の文章の引用のよって表面的な変化は少ないものの、日記の中の老いについてや、「生きている兵隊」発禁処分について考えの削除、あるいは作中で「私」によって一貫して言及されている「模倣」の問題は、「女生徒」のオリジナル性を保証する要素であると言って良いだろう。

「女生徒」がオリジナルな作品として成立していること、そして「模倣」によって成立していること、以上二つの事柄は両立する。すなわち、「女生徒」は日記の「模倣」ではあるが、それが「個性」を保証している。こうして作品の中での「私」による、「個性」と「模倣」の二項対立の型は相対化され、境界は曖昧となってしまうことになる。このことは本作品を読了したときにはじめて成立する。なぜな

ら作品全体がどのように構成されているかは、最後まで読まないとわからないためだ。したがって、この考えを作品に適用すると、作中で言及されていた現実である「模倣」と理想である「個性」との二項対立は、作品が幕を閉じると同時に解消されてしまう。「模倣」と「個性」だけではなく、「私」が辿り着いた、母の「模倣」に留まる「同じ弱い女」という自己規定も「模倣」なのか「個性」なのか、どちらかに定めることはできなくなってしまう。「女生徒」の語り手である「私」についてまとめると、結局「個性」の発現は叶わずに「模倣」で終わり、暫定的な自己規定も曖昧なものとされて「個性」と「模倣」の合間を彷徨するというのが、本作品の創作過程を考慮したときの結論であろう。

もちろん、「女生徒」の引用元である有明の日記の存在は、作品発表当時は知られていなかったし、その日記からどれほど引用されているかということは二〇〇〇年の「資料集　第一輯」刊行まで知ることはできなかった。だが、日記から「模倣」して作品が創作されたという事象は、日記が公にされていなくても事実として存在していたと考えれば、「模倣」と「個性」の境界の曖昧さの指摘は一定の説得性があると考えても良かろう。

先行研究で前提とされていた「不安定」さに立ち返ると、それは日記の改変、その中でも特に並び替えが要因だと考えられよう。「不安定」さは先ほど述べた通り、話題や心情の移り変わりの動きが大きいことであると考えられ、それが思春期と結合させられてきた。ところが、主として日記の出来事の並び替えがその正体だとすれば、やはりこれを思春期と結びつけるのは不十分だと言わざるを得ない。並び替えの結果として生じた、原典の日記を超える断片性は、女学生の「私」と結びつけたときに思春期特有の「不安定」さを思い起こさせることを否定できず、後に論及する本作品の女学生言説への加担の可能性の一因となる。しかし日記の内容の並び替えが、太宰による加筆や修正と合わせて「模倣」となり、それが「女生徒」成立の本質となること、そして思春期の「不安定」さという言葉に回収されていた断片性が、作中に分散されたあらゆる単語と相俟って、あらゆる解釈を生み出させる発端となることは念頭に置いておきたい。

五　「模倣」で終わる「私」

作品末尾では、眠りに落ちるときの感覚と「おやすみなさい」という言葉によって就寝する様子がうかがえるが、そこで小説は終わる。その直前に、「私」は次のような行為をすることが書かれる。

> 私は悲しい癖で、顔を両手でぴつたり覆つてゐなければ、眠れない。顔を覆つて、じつとしてゐる。

就寝前に登場した「新ちゃん」は盲目で、その上何も言わず、「無心の顔つき」をしており、それが「私の胸に、ピンと来てしまう」と説明されていた。「私」は「新ちゃん」にあこがれていると言えよ

う。目を覆うという「私」の行為は、意図的に視界を遮断するものであり、盲目の真似をしているように見える。ここでも「私」は自分が厭う「模倣」から抜け出すことはできない。

おやすみなさい。私は、王子さまのゐないシンデレラ姫。あたし、東京の、どこにゐるか、ごぞんじですか？　もう、ふたたびお目にかかりません。

以上が小説の末尾に当たる部分であり、これによってこの小説は閉じられる。全編にわたって語り手「私」の語りで構成されているために、その語りが終わると同時に小説が終わるという二者の重なりを指摘しなくとも、当然小説の終幕とともに「私」も姿を消す。

ここで思い出すべきは、「私」が現実の女学生を読者の内部に喚起させることである。女学生を想起させる「私」の消滅後も、その女学生像は読者の中に残り続けるが、「模倣」と「個性」が現実の作品成立によって曖昧なものとなることを念頭に置きたい。「女生徒」という作品はそれ自体の成立で、「個性」と「模倣」の境が曖昧であることを示しており、作中の「私」による二項対立を解きほぐすはたらきがあった。だが、小説内部にいる「私」の視点から見れば、自身は依然として「模倣」から抜け出せないという状態にある。これは「私」の「模倣」／「個性」の構図が小説の中のみのものであり、作品の幕引きとともに消失することを示している。そして同時に、川端の評価からうかがえるような当時の紋切り型の「少女」像や、実在の地名によって想起させられた現実の女学生イメージは小説内部に、すなわち虚構に留まることと同義ではないだろうか。

というのは、先に述べた通り、同時代において広く認められていた女学生像や少女像は、少女小説や雑誌に触発されたもの、もしくは世間から望まれたものであったためだ。そうした像は女学生固有の特徴、「個性」とされ、現実の女学生は自らこれを「模倣」していたことにも言及した。つまり世間の理解と、女学生の実際のあり方には齟齬があったということになる。「女学生」という小説は、成立過程において「個性」と「模倣」との区別を漠然とさせ、現実世界の様相を体現していたと考えられよう。

引用部分の末尾の解釈に関して、一日は終わるにも関わらず、「王子さまのゐないシンデレラ姫」を「私」の自己規定であるとし、ここから生まれる「不安定な情緒はそのまま残ってしまう」と主張した宮内論[34]や、「虚無の絶望的な暗さ」を指摘し、饗庭孝男の「暗黒の思念」の一端を担う要素であると主張する坂森美奈論[35]が挙げられる。兼弘は「自分は王子さまが訪れるような特別な人間ではないのであり、苦しみながらもその苦しみを受け入れている多くの人々と同じように強く生きていこうとする意識が窺える」とした[36]。また平石典子は、「私」の少女性を指摘し、「私」は「誰（どんな男）のものにもならない少女」であり、「永遠の〈少女〉として生き続ける」と結論づけた[37]。

「シンデレラ」という比喩表現によって、論者は各自で多様な解釈を促されている。一方で、「この結びの、とりわけ最後の一文の意味

するところは何か、それを改めて問うても意味はあるまい。読み手の関心を瞬時に気化させてしまうような効果のある一文ではあるが、そこに敢えて意味を探ろうとする試みは、日本近代の伝統的なリアリズムの方法に凭れかかっていくことでしかないであろう」という主張が傳馬義澄によってなされている[38]。

傳馬の主張について、関心を気化させてしまう効果があることに対しては疑問が残るところではあるが、意味を探ろうとする試みに限界があることには説得性がある。「女生徒」の先行研究に「少女」性という一定の方向づけがされているのにも関らず、先に挙げたように解釈の幅が広く、まとまりがないことも、一義的な意味づけの困難さを示しているように見られる。この特徴的な末尾は、太宰が受け取った有明の日記の裏に書かれたものである。女学生の姿を読者に意識させる本作品の特徴を考慮したとき、このような文章で締めくくられるのは、小説末尾まで、自身を「シンデレラ姫」に仮託し「王子さま」を待ち望む女学生らしさを「私」に付与し、「女生徒」という題名から始まる作品を「女生徒」のイメージで締めくくるためだと考えられないだろうか。読者は強烈な女学生イメージを「私」に付与させられたまま、この小説を読了する。

六　読者を相対化する「私」

本作品の成立によって二項対立を解消されてしまうことで、女学生としての「私」の虚構性が明らかにされ、さらには女学生言説が虚構のものとされることを述べてきた。「私」とその小説自体によって言説構築が行われ、小説においては言説の虚構性が暴露される。

作品を読む前から「女生徒」における語り手「私」には事前にイメージが与えられ、一定の方向へ固定化されていることがわかる。「女生徒」という題名から始まり、「私」の語りが重ねられていく。学校へ行く支度をしたり、電車に乗ったり、今井田夫婦に接待をしたりする「私」の行動に付け加えられる心情の吐露は、読者に一人の女学生の内心が書かれているのだと判断させるには充分だろう。読者の中では、それぞれ勝手に女学生としての「私」像を完成させていく。「あさ、眼をさますときの気持は、面白い」という作品冒頭での発話ではもうすでに、語り手「私」は性別だけではなく、年代と社会的な位置を定められていることになる。このことも女学生の言説を読者の中に構築させる要因だと言えるだろう。

「女生徒」を通して、女学生についての言説が構築されるのは、「私」は小説という虚構の中の人物にすぎないと読者が十分認識できていても、現実の女学生に重ねてしまうということもあろう。その要因として、読者が女学生にはなったことがないからというのが一点挙げられよう。太宰の読者層として、当時の男性読者が予想される。あるいは、女学生であったり、女学生を経験していたりしたらどうだろうか。冒頭に述べたように自ら言説構築に加担していく様子も現実には見られたことを考えれば、小説内の「私」を「模倣」したことを過去や現在に見出す読者や、自分はそうしたことはなくても、「私」によって想起させられた女学生像を雑誌に見出す読者が予想

される。

ところで、「私」は自分を女学生という言説にしたがっているかのような語りを繰り広げ、読者に女学生の姿を彷彿とさせるだけではなく、周囲や世の中の人々に解釈を加えることで言説を構築していく。先ほど述べた男女の言説がそれにあたる。これが「模倣」とも「個性」とも言えないことは確認してきた通りだ。しかし、「同じ弱い女」の基礎となっている「男」／「女」の二項対立は解消されてはいない。この点については、さらに論究する必要があるだろう。

作中で「私」によって仄めかされる結婚について考えると、男女の場合は、根本的に女性が男性を必要とするだけではなく、男性も女性を必要とすることは自明である。それは恋愛や結婚というものが相互的なものであることを示すと同時に、この事柄自体のみを考えたときの二者の間の優劣は、そこにはないということになるだろう。「私」は周囲の女性に対しては、「男」に寄りかかっていると思われる要素を「雌」と称して抽出し、周囲の男性に対しては結婚を意識しているかのように語る。そして「私自身、くるしいの、やりきれないのと言つてお母さんに完全にぶらさがつてゐるくせに、お母さんが少しでも私に寄りかかつたりすると、いやらしく、薄汚いものを見たやうな気持がするのは、本当に、わがままずぎる」と言った後に「同じ弱い女」という枠を自分と母に当てはめることで、「弱い女」がどのようなものかが説明されている。以上からわかるように、作品全体にわたって「男」と「女」を対立させ、「ぶらさが」る存在として、「私」なりに結婚における「女」を定義している。しかし、男女が結婚することそれ自体に優劣関係はなく、「男」と「女」との間の二項対立は「私」が創りあげた言説だと言える。

こうした「私」の考え方は、太宰が日記を改変した「女生徒」という作品の読者が、女学生に関する言説の構築に加担していることと重なる。作品すべてが「私」の一人称の語りで構成されているのは、原典である有明の日記に触発されたこともあろうが、ある一人の人間の中での言説構築の様子を描いているとも言えるのではないか。「世の中」への言説を構築していく「私」の様子は、女学生言説を構築していく読者の姿を相対化することになる。

ここまでの論をまとめると、語り手「私」は、同時代の「女学生らしさ」を露出しながら、自らの「模倣」の傾向を語る。読者は表紙や表題、「私」の語りを組み合わせて、「私」を女学生として認知し、女学生の言説を作り上げていく。その言説は実体的な女学生ではなく、小説や雑誌を起源とするものであった。実際に女学生がその虚像を「模倣」したこともあって、女学生の「個性」としての女学生言説は人々の中に固定化されていた。

ところが、「女生徒」の成立が有明の日記の「模倣」であり、「個性」である以上、二者の境界線を明確に決定づけることはできなくなってしまう。こうした対立の解消があったとしても、小説内の「私」にとっては、就寝前まで「模倣」することを脱せず、「個性」の実現の不可能性で終わり、この二項対立は保存されたままとなってしまう。これらには「個性」単体の否定が共通している。要するに、作品内の言葉を借用すると、「本当の自分」など実在しないとい

うことが示されているのではないだろうか。同時代で特有の「個性」を持つとされていた女学生像への批判のみならず、「本当の」女学生と定義できるような女学生は存在しないことが含意されていると考えられる。

最後に注意しておきたいのは、以上で述べてきたような読者は「女生徒」を読んだすべての人間に当てはまることではないということだ。もちろん、作品発表当時においても、少女小説や雑誌の影響を受けて、世間の一般的な女学生への認識が一定の枠組みを持たされていたことは確かであり、現在もまた同様であると言えるだろう。だが、「私」の語りに女学生的要素が認められたとしても、その現実性を疑う読者もいることは言うまでもない。

おわりに

「女生徒」の語り手の「少女」性は、同時代評から大半の先行研究の中で論じられてきた。だがこの作品はそうした「私」のイメージに留まらず、「個性」と「模倣」に焦点としたときに、作品内においては「模倣」に対する「個性」の不可能性を、作品成立においては両者の境界の曖昧さから両者の区別や優劣決定の不可能性を示すことを指摘した。共通して指摘できるのは「個性」発露の不可能性であり、「本当の自分」の実現を疑問視していたということになる。これによって、当時の女学生に関する言説の虚構性をあぶり出したと言えよう。それは「女学生」が特有の「個性」をもつという言説への批判だけではなく、「本当の」女学生なるもの（「本当の自分」）を追い求めることへの批判にも連結していく。

だが読者の読みは各々異なることは留意しておかねばならない。本稿で述べたような作品から促される女学生イメージは、作品が読者に与える方向性にすぎない。この方向性を基礎として、読書中、読了後、再読中、再読後と作品に触れた瞬間から、読者は各自思い思いの解釈を進めていく。思春期の特性に収斂されていた「不安定」さは、本作品成立の核であったが、その断片性は読者を刺激し、解釈の幅を広げる一翼を担うと言えよう。

（たなか　ほなみ・人文学専攻）

【注】

＊本稿における「女生徒」の本文引用は、山内祥史編『太宰治全集』第二巻（筑摩書房、一九八九・八）による。

1 川端康成「文芸時評」『文藝春秋』一九三九・五／川端康成「太宰治氏の『女生徒』と『懶惰の歌留多』」（『川端康成全集』第一九巻、一九七四・三）48頁。

2 関谷一郎「『女生徒』試論」（『国文学　解釈と鑑賞』五二巻第六号、一九八七・六）。

3 奥野健男「生涯と人生」（『太宰治論』増補決定版、春秋社、一九六八・一）75～76頁。

4 榎本隆司「『女生徒』論」（『作品論太宰治』、双文社、一九七九）。

5 東郷克美「女性独白体の発見」（『太宰治という物語』筑摩書房、二〇〇一・三）124～125頁。

6 東郷前掲書130頁。
7 兼弘かづき「太宰治『女生徒』論――女生徒の新しい出発と『家族』の意義」（『日本文藝研究』五三巻第四号、二〇〇二・三）。
8 後藤康二「『女生徒』について」（『芸術至上主義文芸』二三巻、一九九七・一二）。
9 根岸泰子「女生徒――可憐で、魅力があり、少しは高貴でもある少女」（『国文学　解釈と教材の研究』四四巻第七号、一九九六・六）。
10 伊藤友紀恵「太宰治『女生徒』論――視意識と末尾」（『阪大近代文学研究』一四巻、二〇一七・三）。
11 宮内淳子「『女生徒』論――『カラッポ』を語るとき――」（『太宰治研究』四巻、和泉書院、一九九七・七）。
12 中村桃子『女ことばと日本語』（岩波新書、二〇一二・八、p108）。
13 中村前掲書111頁。
14 中村前掲書114～119頁。
15 中村前掲書108～109頁。
16 本田和子『女学生の系譜』（青土社、一九九〇・七）191頁。
17 今田絵里香『少年少女の誕生』（ミネルヴァ書房、二〇一九・一〇）210頁。
18 今田前掲書189頁。
19 菅聡子『女が国家を裏切るとき』（岩波書店、二〇一一・一）191頁。
20 久米依子『少女小説の生成　ジェンダー・ポリティクスの世紀』（青弓社、二〇一三・六）189頁。
21 伊藤前掲論文。
22 関根順子「太宰治『女生徒』論：消された有明淑の語り」（『東洋大学大学院紀要』五一巻、二〇一四）。
23 渡部周子『〈少女〉像の誕生』（新泉社、二〇〇七・一二）217頁。
24 渡部前掲書224頁。
25 青森県立図書館・青森県近代文学館編『資料集　第一輯』（青森県近代文学館、二〇〇〇・二）38頁。
26 兼弘前掲論文。
27 青森県立図書館・青森県近代文学館編前掲書45頁。
28 青森県立図書館・青森県近代文学館編前掲書51頁。
29 関根前掲論文。
30 青森県立図書館・青森県近代文学館編前掲書23頁、（日記で斜線によって削除された部分は省略してある）。
31 青森県立図書館・青森県近代文学館編前掲書35頁。
32 吉田咲「『ある』と思えば『からっぽ』――太宰治『女生徒』」（『文藝と批評』一〇巻二号、二〇〇五・一一）。
33 細谷博「『女生徒』の自立性――『有明淑の日記』との関係で」（『アカデミア　文学・語学編』七三巻、二〇〇三・一）。
34 宮内前掲論文。
35 坂森美奈「太宰治『女生徒』論」（『国語国文学』四三巻、二〇〇四・三）。
36 兼弘前掲論文。
37 平石典子「少女とロココ――『女生徒』における〈少女〉表象」（増田裕美子・佐伯順子編『日本文学の「女性性」』、思文閣出版、二〇一一）。
38 傳馬義澄「女生徒」」（『国文学解釈と鑑賞』六一巻六号　10、至文堂、一九九六・六）。